



一 愛ラブドライバー（水星）

「お疲れ様です」

車の後部座席のドアを開ける。不自然な呼吸をしながら、息も絶え絶えなシンデレラが座席シートに滑り込んできた。ドライバーはすぐにやさしく声を掛けた。

「もう、嫌になっちゃう。あのお客。あたしの心の中まで侵入してくるんだから。一体、どこの星から来たのかしら」

車の中に入るや否や、シンデレラはすぐに客への不満や悪口を言い放つ。

「だって、相手はギリギリ星人よ。シンデレラとギリギリ星人とどんな夢が共有できるって言うの。ガラスの靴の代わりに、バッタの羽でもつけろというの。きゅうりでもかじれというの」

「それは、大変だったですね」

ドライバーはバックミラーからシンデレラの様子を伺う。彼女はもう仕事着の白いドレスを脱ぎ、ガラスじゃなくプラスチックの透明な靴を空いている座席に放り投げた。彼女たちの服装や身につけるものは、童話の主人公の服装などを忠実に模倣しているが、こういうことがあるため、破れにくかったり、割れたりするものは控えている。

「次のお客さんは？」

シンデレラでなくなった女は車のガラス窓からさっきまで自分がいたホテルの部屋の辺りを見つめる。

「後、一時間後です」

ドライバーは車のエンジンをかけた。車は垂直に浮くと、摩天楼の間を縫うように水星の空を飛んでいく。

「そう」

女はそんな答えなんかどうでもいいかのように、そっけなく呟いた。この雰囲気は少しでもよく

したい、和やかなものにしたい、とドライバーは思うものの、何もいい言葉が出てこない。ただ、彼女たちの不満や愚痴に頷いたり、相槌を打ったりする程度だ。

以前、何かのきっかけで、アドバイスをしたところ、「あんたなんかの意見なんて聞いていないよ」と、冷たくあしらわれたこともあって、ここ最近では、掛ける言葉を失っているのが現状である。

「あーあ、もうこの仕事をやめようかな」

白いドレスを脱いだシンデレラが車のガラス窓から外をうつろに眺める。時間は十二時を過ぎている。彼女の瞳には、漆黒の闇の中に、不釣り合いなぐらいに輝くビルやホテル、マンションの灯りが映る。暗闇は暗闇でいいではないか。そこに無理やりに、灯りを求めるのは不自然ではないか。だが、その不自然さゆえに、シンデレラのような仕事が求められるのだろうし、ドライバーのような仕事も必要になるのだ。

生命が生きていくためには、光だけで不十分なのである。闇が必要なのである。光はエネルギーを充填するため、闇は摂取し過ぎた過剰なエネルギーを放出するために存在するのだ。それを知っているからこそ、太陽は自らを燃やししながら、物質に光と影を与えるのだった。その太陽の光が一番近くに届くのが、ここ水星なのだ。

「ヘッドフォンを付けてください」

ドライバーはできるだけ感情を押し殺して、マニュアルどおりの依頼をする。

「わかっているわよ。今は、感情がいっぱい、体が動かないのよ」

彼女は体をくの字にして自分の体を包み込むよう座席に横たわっている。余程疲れたのだろう。

「わかっています。でも、ヘッドフォンをつけないと、感情で体が爆発してしまいます」

ドライバーは父のような気持ちで彼女をいたわる。

「なんで、こんな面倒なことをしないとイケないの。お客さんがつけて、感情を爆発すれば済むことじゃないの。どうして、あたしがお客さんの感情を一旦、受け止めないとイケないのよ」

今日の彼女は攻撃的で、饒舌だ。よほどさっきのお客さんとの体験が衝撃的だったのだろうか

。「お客さんは、シンデレラさんとの直接的なふれあいを求めているのです。それで、わたしたちの商売も成り立っているのです」

「商品はわたしでしょう。あなたは単なるおまけよ」

彼女は味がなくなったガムを吐き捨てるように言い放つ。だが、ドライバーの言葉に納得したのか、前の席の椅子の背もたれからヘッドフォンを持ち上げるとしゅしゅと頭に装着した。そして目を閉じた。しばらくすると、車に入ってきた時は、目が吊り上がり、額に皺を寄せるなど、激しい顔つきだった彼女の顔は、次第に眼尻が下がり、口角も自然に上がっていく。

何の夢を見ているのだろうか。それともお客さんの感情がヘッドフォンに吸い取られて平穏な気持ちになっているのだろうか。いつものことながら、彼も気になるところだ。だが、気にしながらも、次の目的地へと向かう。それが彼の仕事だ。

「もうすぐ着きますよ」

ドライバーは空気の中に拡散するような声で囁く。夢心地の彼女を刺激しないためだ。彼の声はヘッドフォンを通じて伝わったのか、彼女は目を開け、ヘッドフォンをゆっくりとはずした。車に乗り込んできた時のような険悪な表情はない。反対に、にこにこ微笑んでいる。今日の初めて仕事のようなそぶりだ。さっきまでの記憶はないのか。改めて、ヘッドフォンの能力に恐れ入る。

ただし、たまには、ヘッドフォンを装着する時間が短かったのか、それとも、お客さんの体験が壮絶過ぎたのか、彼女たちの脳になかに残っていると思われるときもある。それは、彼女たちの顔つきを見ればすぐにわかる。そんな時は、予約時間が迫っていても、時間を伸ばすために、ホテルの周辺を何回も飛行し、時間を稼ぐ。店には再度、お客さんに、車が混んでいるので遅れていますので、もうしばらくお待ちください、と連絡してもらおう。

彼女たちが不機嫌なままでは、お客さんにとっても不機嫌であり、店にとっても不機嫌な結果となるのが目に見えているからだ。これなら大丈夫だと思えたときに、最高の状態のときに、彼女をお客さんの下に案内するのだ。それが、お客さんにとっても、彼女にとっても、お店にとっても、最高の結果となるのだ。それは、現場を預かるドライバーの責任でもあり、義務でもある。

「次は、妖精ですよ」

ドライバーは彼女の様子を伺い、刺激しないように呟いた。初めて見るように、目をくりくりとさせて窓の外の景色を眺めていた彼女は、その声を聞いて、隣の座席シートに置かれている羽のある妖精のレオタードをじっと見る。

「妖精って蝶々ぐらいの大きさで、もっと体が小さいんじゃないの。あたしは人間よ」とさっきまで、シンデレラだったことを忘れたかのように、体の線が露になるような収縮したレオタードを手を取った。

「ここは妖精の住む星なんです。だから、お客さんは妖精を好むんです」

「だったら、あたしなんかじゃなく、本物の妖精を呼べばいいんじゃない」

「本物の妖精だと犯罪になります」

「あたしだったら犯罪にならないの」

また、元に戻った。今日の彼女は機嫌が悪い。彼の言葉にいちいち突っ掛かってくる。ヘッドフォンの効果はないのか。先ほどの客がよほどひどかったのか。だが、彼女たちがいて初めて、彼のようなものでも仕事になる。ここは我慢するしかない。それよりも、このまま、お客さんのところに送り出すのに不安を感じる。

「ほんと。お客さんって変態ね。妖精のどこがいいのかしら。まあ、シンデレラも同じようなものだけだね」と文句を言いながらもレオタードに足を通す。

「これじゃ、まるでサンバみたい」

彼女は妖精のレオタードを身につけ、車の窓ガラスに自分の姿を映す。胸には白いフリルが着き、背中の中は車の天井とシートで折れ曲がっている。

目的地のホテルに着いた。お客さんが指名した場所だ。要した時間はちょうど一時間。だが、ドライバーにとっては、時計の長針を十二コマ進んだにしか過ぎない。いつも思う。時間が経過するとはどういうことなのだ。本当に、時間というものが存在するのか。時間の概念とは何か。時間が、一分経過しました、十分経過しましたと告げるわけではない。時間が過ぎていくという認識が欠如している。

確かに、物理的には、太陽が東から出て、西に沈んでいく。（実際は、この星が回転しているに

すぎないのだ。人は、所詮、自分の視線でしか、物事を把握できないのだ、という証明でもある。)それに従い、ドライバーのお腹も減る。体も疲れる。眠たくなる。だが、それが時間の正体なのか。同じ時間の中で、自分の体に変化しているだけではないだろうか。いつもそう感じている。

「行ってきます」

誰に語り掛けるわけでもなく、シンデレラから妖精に変身した彼女はホテルの玄関に向かって足を交差させながら歩いて行く。そう、既に妖精になりきり、サンバのダンスを踊っている。その姿を見て、ドライバーは少し安心した。

「行ってらっしゃいませ」

ドライバーは妖精の背中に向かって頭を下げる。次は、彼女にどのような体験が待っているかは、彼女しか知らない。いや、あのヘッドフォンだけは知っている。彼女の体験した記憶をすべて吸収するヘッドフォンだ。そのヘッドフォンはすぐそばにある。手を伸ばせば届く距離だ。

「決して、ヘッドフォンには手を触れるな」

そのことはドライバーが雇われる際の、契約事項だった。だが、人は禁止だと言われれば言われるほど、破りたがるものなのだ。いつだったか、ドライバーに成り立ての頃、ヘッドフォンを自分の右耳を当てたことがある。おぞましいような、地獄に吸い込まれるような気がして、急いで耳から離れた。それから数日間、耳の奥から、招かれざる客から手招きの声がしているようで、眠れない日が続いた。それ以来、どんなことがあっても、ヘッドフォンには触れないようにしている。

以前、彼は地球でタクシードライバーをしていた。だが、商売敵が多くなって、地球から金星、そして水星に流れてきた。地球から離れれば離れるほど、タクシードライバーの需要は多かった。毎日のようにお客を運んだ。そのうちに、この業界を知った。知らないお客を乗せるよりも、知り合いの女性を乗せる方が楽だったからだ。それに、彼女たちの仕事も気になった。

一度だけ、彼女たちの一人と体験したことがある。確か、アルプスの少女ハイジだったか。別に、彼が少女趣味だったわけではない。たまたま、ハイジの予約ができただけだ。彼女とのやりとりでは、彼のこれまでの辛いことや苦しかったことなど、負感情を何もかも忘れられる経験だった。なぜ、お客が彼女たちを求める理由が彼にもよくわかった。ただし、それだけ彼女たちには精神的な重労働が課せられているのだ。そんな彼女たちを少しでも役に立ちたい。そのことが彼を今でもドライバーを続けさせている理由だ。

だが、彼女たちはそんなことは知らない。彼女たちにとって彼は単なるドライバーの一人ではない。おまけにもならない。お客にとって彼女たちは代替がきかなくても、ドライバーの替えはいくらでもいる。もちろん、そんなことは彼も十分承知だ。知っている上で、彼女たちをやさしく見送り、温かく迎えたのだ。

ほのかな恋心。まさか、この年齢で。彼は急いでそんな気持ちを打ち消した。そう、彼は人類の年齢で言えば六十歳は過ぎていた。いわゆる、還暦だ。だが、体はいくら六十年間酷使してきても、心まで古びているとは思わなかった。心の年齢は生まれて間もないのだ。地球では、恋は遠い日の花火じゃない、という言葉がある。ここ水星では、恋は遠い日の流れ星じゃない、のだ。いつ、訪れるかわからないし、いつでも訪れるものなのだ。このかすかなあこがれが、彼を生かしている。だが、やはり、そこは、大人の男性。一旦は肯定した恋心を再び否定した。そして、誰かに、お客さん、彼女たち、会社に役立ちたいという思いが自分を動かしている、という気持ちに上塗りした。

「今、部屋に入りました」

彼女からの連絡だ。

「わかりました」

彼は最小限の返事をする、さつきシンデレラを乗せたホテルに車で向かった。ホテルの玄関前に車を止める。後部座席のドアを開ける。

「お疲れ様でした」

そこには、新月のように顔面蒼白のかぐや姫が立っていた。